



## 柳 たかを 新連載

2015年3月末までの10年間、兵庫県宝塚市の芸術系私立大学でマンガの専任教員として学生諸君と共に学んできました。

子供の頃から手塚治虫のファンで文系の私立大学生だった40数年前は、おもにストーリーマンガを描いていました。手塚治虫の著書で「マンガ家をめざす人は、四コママンガはマンガの基礎、勉強しておくべき」と書いてあったので、あわてて外国雑誌のコマ漫画を参考に練習したあたりからカートゥーンに目覚めたと思います。

大阪の夕刊紙が日曜版紙面にコマ漫画の募集をしていて、腕試しに応募したところ、幸運にも採用され「入社されたし」とのハガキをもらったことが縁でマンガを描いて原稿料がもらえるようになりました。

一生マンガを描いて生きていきたいけれど、それは雑誌のストーリーマンガにかぎらないという気持ちも強く、結局なにがなんでも上京して、ストーリーマンガ家をめざす道は選びませんでした。

マンガ領域に入学してくる学生の多くは、程度の差はあれ好きな絵を描いて生きていきたいという素朴な夢を持っています。私は画力がなくても描きたい思いの強い人、授業を休まない人、そういう学生を励ますことに魅力を感じていました。

とくに4年生時の卒業制作の指導では、

自分に何を作れるのかわからないという学生と本人が納得するまでじっくり話し合い目標をもたせ、励まし続けて取り組ませ、完成が見えるところまで応援することに教員としてやりがいを感じました。

今振り返ると、私自身がドロップアウトつまり受験競争や就職から距離をおき、マンガ道に慰めと生きがいを見出そうとした人であり、かつての不安な自分が目の前の学生とオーバーラップし、学生を励ましているつもりが心の中の自分を励ましていたようにも思っています。

新連載「東成区の昭和・思い出ほろほろメモ」は、幼い頃の迷いや不安は前に進むために誰もがくぐる壁で、おなじ苦労なら楽しむ気持ちを忘れないでという願いをもって描いていた作品です。



## 齋藤 清二

昨年までも、もちろん京都にくる機会はたくさんあったが、ほとんどが仕事でとんぼ返りであり、じっくりと京都の街や観光スポットを見てまわるというような機会はほとんどなかった。さらに、ここ2、3年は特に観光シーズンに京都の宿を確保することが難しく、紅葉に対するあこがれはますばかりであった。今年はずいに念願の京都に住むようになったのだから、紅葉の観光スポットを出来る限り見て回るぞ、と意気込んでいたのだが、(実際にいくつか行って見たのだが)、そこで気がついたのは、モミジの樹が紅葉するのは、一斉に起こるのではなく、場所によって、あるいは個々の樹によって大きなばらつきがあるということ。さらに同じ樹木でも、枝の先端と樹幹に近いところでは時間差があること。ある樹のある枝が、見事に紅葉しているときには、他の部分はすでに葉が落ちてしまっていたり、逆にまだ緑だったりとすること。これらは良く考えてみれば

当たり前なのだが、「当園の紅葉は今が見頃です」というような標準化(?)に意味があるのだろうか、と改めて考えさせられた。こんなことを考えながらモミジを見ていると、ある意味では興味深いのだが、目の前の「今、ここ」のモミジを全身で体感するという経験からはどうしてもズレてしまうので、これも性格かなあ、とあらためて考えさせられている今日この頃です。

## 石田 佳子

最近、私は“早起き・ジョギング・ラジオ体操”にはまっています。これまでは夜型で運動とは無縁だった私が、これほど健康的な日課を実現しているのは、数十年ぶりどころか生まれて初めてです。というのも、持病の治療が必要になって、日本に戻って一人で暮らしているからで、良いことと悪いことは同時にやってくるのかもしれない。

今住んでいるのは、関西国際空港の近くの小さな町で、現役時代に住んでいた京都や静岡の都市部とはだいぶ雰囲気違います。臆病な私たち夫婦は、「実際に暮らしてみなければ、マレーシアを“終の棲家”にできるかどうか、わからない」と考えたため、その見極めがつくまでいつでも帰れる(家財道具を保管しておけ、帰国時の宿代わりにもなる)場所として、この町に小さな住まいを確保したまま、マレーシアでの生活を営んで来たのです。

だから、当初は登山のためのベースキャンプのように「拠点として便利なこと」意外は期待していなかったのですが、住んでみると次のようなメリットに気づきました。

- ① 家賃・物価が安い。② 大型商業施設は少ないが、中小規模のスーパーと産地直送店が多い。
- ③ 人と車が少ないので、空気がきれい。
- ④ 地域住人の顔つきが穏やか(大人は大阪中心部へ

働きに出ているため、昼間は老人と子どもばかり)。。。とりわけ、地元で採れた新鮮な旬の野菜や海産物などが安く手に入ることは、私にとって大きなメリットでした。ちなみに、この数か月間マレーシアでは、空気が淀んで前方が見えないほどヘイズ(大気汚染)が酷く、健康被害を避けた

め、屋内に閉じこもる人が多かったようです。人は幸せになるために働いてお金を稼いでいるけれど、幸せに暮らすためには物をたくさん持つことや遠くへ行くことが必要な訳ではなくて、案外身近でシンプルなことが大切なのだ、と思ったりしています。

## 小池英梨子

先日、衝動的に自転車で姉の所まで遊びに行ってきました。日の出とともに兵庫県西宮市の家を出て、17時に東舞鶴に到着。122キロ、11時間、もう二度とやりません。でも信号の少ない田舎道をただただ走るのは気持ちよかったです。



途中から未体験のアキレス腱の痛みに襲われるまでは。素敵な景色や特大の芋虫や蛇、未知との遭遇ともいえる道中はとても楽しかったです。

ハプニングさえ楽しめる心の余裕を忘れてくれないな—と思った休日でした。

どうぶつ基金 HP はこちら

<https://www.doubutukikin.or.jp/>

## しすてむきよたけ

僕は石川県金沢市を拠点とし、「清武システムズ」を運営中です。一人なので運営するというほどのものではないです。何をやる会社かも決めていません。しかし、ありがたい事に数年前からいくつか仕事をいただいています。

今年の夏くらいに思いがけない依頼がありました。3、4年ぶりに、京都で再会をし、会話の流れで東京発のプロジェクトに参加ご依頼をいただきました。そんなに長い付き合いでもないのですが、興味深い人だと思っていたこと、まさかそんな話が出ると思っていたいなかったので、嬉しさと驚きの出来事でした。

お話をくれた彼女は、人を探し中だったようですが、これまで計4時間くらいしか

同じ時間を過ごしたことがない僕らですから、ほぼほぼ当時の印象と今の印象を受け、直感とタイミングで起きたことだと思います。

最初は、事務局開設にあたり、急ぎでもあったようでNPOの理事に。ところが、気付いたら、あっという間に事務局長になっていました。

適任だと思いませんが、いろいろな状況の中で決まったのだから、知り合った方々にご協力いただいている最中です。腹を括っている最中でもあります。

これも、お誘いくださった方の頑張っている姿に影響を受けたことに違いありませんでした。今はその方だけでなく、他のメンバーのそれぞれ違う役割と視点にも影響を受け、結構迷惑なこともしているだろうと思いつつ、ヤンヤヤンヤ動かせていただいています。

ということで、「清武システムズ」東京に出没中！

さらに、並行して新しいコトも進め始めています。挑戦し、形にしてみようと思いません。東京話があったから、また、行くことの目的が不明な段階から話に付き合ってくれる人たちの存在が具体化させてくれるように思います。自分の動き方を振り返り、思いついただけでもありますが！

さ〜年度末後半、僕は忙し、でもすっごく貧乏！でも、だからできること、知り合うこと、増える仕事がある。巡り合わせで起きていく今を楽しんでいます！

## 小林茂

浦河でも、日に日に寒くなりました。しかし、北海道でも本格的に雪が降るまでもなく防寒着を厚くするだけで間に合っています。この時期から楽しみなもの一つにチカ釣りがあります。今日はMr.ベてると呼ばれる早坂 潔さんとチカ釣りに行ってきました。釣れる時は半日で200匹くらい釣れます。チカという魚は、私が浦河に来るまで知らない魚でした。キュウリウオ目キュウリウオ科に属する魚だそうです。しかし、なぜキュウリウオなのかと言えば、形が野菜のきゅうりみたいな形であるのかというと、そうではありません。魚の匂いがきゅうりの青く臭い匂いだから、キュウリウオと言います。大きさ(成長するとイ

ワシぐらいになる)や形自体は淡水魚のワカサギにそっくりで、味も白身でフライにすると、とても上品な味がするおいしい魚です。冬の北海道に来て、居酒屋なんかでチカのフライとメニューにありましたら、ぜひご賞味ください。おいしいですよ。

## 水野スウ

週に一度、わが家をひらいて、誰でもどうぞ。ただそれだけの場である「紅茶の時間」が、2015年の11月でちょうど満32年。

紅茶の誕生月だから、ってわけでもなかったのだけど、毎水曜午後のふつう紅茶にくわえて、11月はたまたま、ゲストのいるとくべつ紅茶が3回あって、私がよそに出かけていく出前紅茶が8回あって、平均すると2日にいっぺん、何かしら紅茶の時間をしているという、めっちゃ忙しく、でもたっぷり充実したひと月となりました。

ゲストの3人目は、娘。本の編集やブックデザインを細々と仕事にしてきた彼女が、これまで歩いてきた自分の道を、集まってくれた人たちの前で、それはそれは誠実に語りました。

きまじめで頭が四角く、その分、生きることにはぶきっちょな娘が、悩み、考え、もがき、自分なりの必要最低限のルールをきめて、それを愚直に守りながら、一步一步。ふと気づけばそれがいつのまに、彼女オリジナルの道になっていったんだなあ。

誇れるような結果は何もだしてない自分だけど、それでも、もしも自分がいなくなると、誰かの胸にぽっかり穴があいたとしたら、その穴をうめられる代わりに人は世界のどこにもいない。「わたし」みたいな人はいるかもしれないけれど、この「わたし」にそっくりそのままかわれる人は、どこにもいない。それはまぎれもない事実なんだ。

『ほめ言葉のシャワー』の最後のコラム、「あなたの存在は、ほかの誰ともとりかえがきません」という言葉は、生き悩んだ彼女ならではの、こんな想いの中から生まれてきたということ。それって、あまり深く悩むことなくハッピーに生きてきた人だったら、たぶんなかなか思いつかない哲学だったのかもしれないなあ。

娘が生まれて、私は切実に子育て仲間がほしくて、ただそれだけの理由ではじめ

た「紅茶の時間」。あの時、0歳だった娘が、今、こんなかたちで自分の等身大の物語を、紅茶の誕生日に、紅茶で語る。

それってまるで、彼女にしかできない、紅茶の時間へのバースデープレゼントのようでした。

## 高垣愉佳

約1年ぶりにラホヤ村に行ってきた。いつもホームレスが居た場所からホームレスが消えていたり、バスの路線が変更になっていたり、ショッピングモールでは拡張工事が始まっていました。これらの変化景気と関連しているのだろうかという事はさておいて、同じ場所でもたった1年でこれだけの違いがあるのだという事を今更ながらに感じました。どんな情報も人の目に触れる頃にはもう別の形に変化しています。私たちが手に入れる事が出来るのは、常に既に古くなった情報だけです。そうした情報の中から何を見出し、何を学び、自分が日々出会う現実はどう生かしていくのが大切なのだと改めて思いました。

## 浦田雅夫

先日、ご縁のあった師匠がご逝去されました。個人的にいつも気にかけていただいております。感謝です。ありがとうございました。

## 早樫一男

最近、万歩計を利用始めました。一日の目標は10000歩ですが、なかなか達成しないというのが現状です。この一カ月の平均は8600歩であり、まだまだ努力が必要な状態です。これまでも、健康管理を意識していました。しかし、「具体的な行動は？」と問われたら「何もしていません」「意識しているだけです」といった答えしか出てこないというのが、実際のところでした。

今回、目標を《数値化》することによって、具体的に動くのだということを実感しているところです。

## 中島弘美

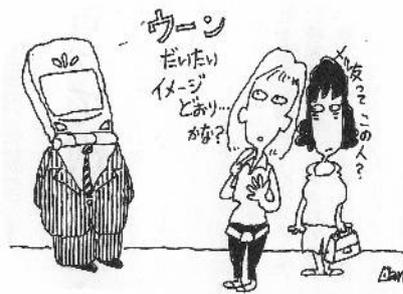
対人援助学マガジン 1~18号は「子どもと家族と学校と」を連載しました。19~22号は「カウンセリングのお作法」を執筆中

です。

2015年10月31日と11月1日、立命館大学で開催された対人援助学会第7回年次大会に参加しての感想をほんの少しばかり。

日頃カウンセリングを通して家族支援をし、大学でカウンセリングや社会福祉士養成の授業を担当しているので、心理、医療、社会福祉、教育等の領域に関心を持っています。大会で取り上げられているテーマに触れていると、新たに経済の視点が加わりました。広い視野というよりも、高い視点、俯瞰でものをみとでもいうのでしょうか、そんな見方の重要性を感じました。経営のことを考えながら仕事をしている個人事業主ではありますが、どうしてもお金の話はあたまわしになって過ごしていることにハッとさせられました。もうひとつの発見は、対人支援をしていることの意味づけをさらに明確にすることの大切さです。なんとなく支援しているのではなく、そのことがどういう意味があり、どう影響するかをさまざまな視点で見直す必要があると思いました。

また、参加者は、大学院生だけでなく、大学の学部生の姿もあって新鮮でした。若い人たちに関心を持っていただき、彼らが育っていくと良いなと目を細める大会だったと思います。



2001年作画

## 木村晃子

この10月に、長い療養生活を終え、父が天国へ旅立った。話すことも、食べることもできず、この数年は、ベッドから起き上がることもできずに、ひたすら横たわっている父だった。本当に、長いこと頑張ってくれたなと思う。自由にならない父の闘病を思うと、天国への旅立は安堵であるが、私は、ぽっかりと穴があいたような気持ち

になっている。想像以上に、父の死は自分にとって大きく影響している。厳しくも寛容な父だった。幼少のころは、夜に寝転びながら、たくさんの本を読んでくれた。抑揚のある読み口は、物語の中へ私をすぐに引き込んでくれた。読書が好きだったのは、その影響なのではないかと思う。

このマガジンの7号では、父と母のことを書いた。13号では、私が子どもの頃に飼っていたひよこの話を書いた。そのどれも父由来だ。そして、今回も私的なことではあるが、哀悼日記として、25年も前の父の書いた病床日記を重ねて書いてみた。紹介しきれないほどの、古い消印の父宛の手紙。当時の若い人の手紙のやりとり、言葉の豊かさや、字の美しさ、そして、見えない相手に伝える心をたくさん発見した。改めて、文字の力を感じた。

対人援助学マガジンが、対人援助に関わる様々な分野からの歴史的記録になることは言うまでもない。専門性而非専門性の交差するところで私たちは日々仕事をしている。誰の役に立つのかわからない私的記録をご容赦願いつつ...

## 藤信子

今年は秋が例年よりも早くきて、久しぶりに以前のような秋らしい晴れた日が続いているうちに、また暖かくなったせいか、紅葉の色があまりよくないように感じる。今日近くの妙心寺を歩いたけれど、くすんだ色の紅葉がほとんどだった。昨年写真だろうと思われる宣伝のポスターのきれいな紅葉を見て観光に来る人はがっかりするんじゃないかと余計な心配をした。樺は割に早く落ちて、銀杏の色は例年と変わらないようだけれど、先週の雨で葉が散ってしまった木もある。銀杏は同じ場所にあっても、先日の雨で落ちてしまった木と、まだ黄色く輝いている木があり、個性が違うように感じるのには私だけだろうか。

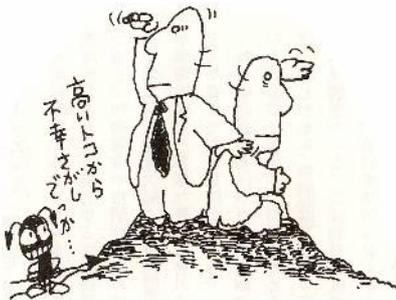
## 中村周平

先日、卒業校である立命館大学大学院応用人間科学研究科に伺わせていただきました。所属していた家族機能・社会臨床クラスターの中村正先生に声を掛けていただき、「ようこそ先輩!」ということで、在



れた引越し屋のサポートもあって、無事に引越しが完了した。また、やく10年ぶりに、マッサージの職種で再就職した。しかも、男性として。さらに、私が体・書類上の性別である女性ではなく、男性の性自認を大事にしながら生きていることを理解してくれた視覚障害のある友人たちまで与えられた。

「俺がいろいろ動いてもなあ。視覚障害はともかく、体の性と心の性が一致してないと、社会的にどうせいろいろ不利になるやろうから」と決めつけて、今まで重い重い腰を上げられなかった私が、引越しを期に、どんどんチャンスが広がっていった。「求めなさい。そうすれば、与えられます。捜しなさい。そうすれば、見つかります。たたきなさい。そうすれば、開かれます。誰であれ、求める者は受け、捜す者は見つけ出し、たたく者には開かれます。」(マタイ7章7, 8節)。私にとって今年、当にこの聖書の言葉を体現したような年であった。



2001年作画

## 袴田洋子

人生、変わりました。いえ、変えました。自分の意思で変えました。それが、今後、幸せをもたらすのか、どうなるのかは、わかりません。でも、少なくとも、「今のままでは、嫌だ」という思いのもとに、これまでのパターンを変えてみよう、これまでしなかったことをするようになりました。そうして、パターンは、変わりました。変わって、よかったです。これぞ、システム論？

## 団遊

ぼくは大分・別府にある立命館アジア太平洋大学というところでキャリア教育の講師をしているのですが、先日、履修登録前の授業ガイダンスで30分ほど話をしたら、ある学生に「素晴らしかったです。も

う話が完成されていますね。ぼくもいつかああいうことを大学生に伝える仕事があったのですが、もう団さんの話で十分です」と言われました。大卒では褒められているのですが、ぼくは同じようなことをよく色んな人に言われます。

大学の先生と言うと「そうか、その見方があったのか！」とか「目からうろこが落ちました」とか「その知性にはどう頑張っても追いつけません」とか「ほとんど寝てました」とか、そんな感想をもらうような気がします。でもぼくに集まってくる感想は、「おれも思ってた」とか「先言われたわ」とか「わかる〜」とか、そんな感じです。

## 乾明紀

前号の短信で、歯痛がやや改善したということを書きましたが、その後痛みは収まらなかったの、ついに抜歯を覚悟で歯科医を訪れました。診察の結果、痛みの原因は歯が内部で割れていたことでした。

歯科医曰く「よく我慢しましたね。歯が折れているので噛む度に麻酔なしで歯を抜いているようなものですよ(小さく笑)。」と。

「おい！もうちょっと様子を見ようって言い続けたのは誰だ！」

でもそれはそれでいい経験でした。ようやく固形の食べ物もおいしいただけて、痛みにも邪魔されず思考できる状態になりました。

## 大石仁美

ワンを飼い始めて、7カ月。ワンは9カ月になりました。この間、ワンの成長ぶりを見ていると、いろいろ面白いことがいっぱいあります。

まず、成長過程は人間の子どもとよく似ています。命が短い分、スピードは速いですが、乗り越えていく段階は同じ。生後2~3か月の頃は、なんでも口にして、舐めたりかじったり。特にタオルが大好きで、いつもよだれでびしょびしょでした。

4~5か月のころに一番手こずったのは、トイレのしつけ。「よしよし」していると、シャーッとおもらし。トイレで排泄できたときは、ごほうび付きで褒めまくり、ほっと喜ん

だのもつかの間、今度は、カーペットの上でシャーッ。こんなことの繰り返しで、サークルに閉じ込めておくと、退屈したのか、トイレシートを引きずり出して、細かく噛み砕き、辺りは紙吹雪どころか、粉じん公害そのもの。ワンも粉が鼻に入って、くしゃみの連続。毎日がこんな調子で、ほどほど疲れてきた頃、トレーナーさんから、「シートがもったいないからサークル中に新聞紙を厚めに敷いたら」とアドバイスを受け、半信半疑で敷いてみると、高分子吸水材入りのシートと違って吸収が悪く、サークル内は尿でびしょびしょ状態になりました。「こりゃ駄目だ！」と思っていたら、二日目から、よほど気持ちが悪かったのか、ワンはサークル内で排泄をしなくなりました。トイレがしたいときは、合図を送ってくるようになったのです。今はトイレをベランダに移し、そこで排泄をしています。こうしてトイレの自立が出来たのです。

ほんまに人間の子と一緒にです。今は紙おむつがほとんどなので、吸収が良い分、気持ちが悪くないので、なかなかおむつが取れません。布おむつの子が、二歳で取れるのに対して、紙おむつの子は3~4歳でやっと取れるという具合。ほんまによう似ています。

6ヶ月になったとき、人間でいえば、小学一年生にあたり、学び始めるには一番いい時期ということで、入所して一か月の集中訓練を受けました。すわれ！伏せ！まて！これはよく覚えて、食事の時、信号待ちの時、立話をしている時などに命じなくても、察してするようになり、感心しています。7か月には、特に階段を降りるとき、飼い主が犬に引っ張られて、転げ落ちたりしないように、厳しく仕込んでくれたおかげで、一步一步人の目を見ながら、ゆっくりゆっくり降りてくれるようになりました。一度に出来るようになったわけではなく、何度も何度も繰り返す中で、行きつ戻りつ、固定した行動になっていったのです。

その後もほぼ毎日のように、訓練に通い、他のワンちゃんたちと走り回って遊ぶのが楽しくてたまらないらしく、お迎えの時間が近づくとそわそわ落ち着きません。幼稚園に通う人間の子どもと同じです。そしてトレーナーさんの顔をみると大はしゃぎしながらも、

キリッとした緊張感に満ちて、出かけていくワンの後ろ姿と、帰宅して、ひっくり返って、デレデレ甘えるワンの姿は子どもそのものです。

最近伏せをしたあと、「コロして！コロン！」

というと、腹をみせてひっくり返るようになったので、ついでに「アーン！」で、歯磨きをするようになりました。歯ブラシは私のお下がり使い、水洗いですが、思いのほか汚れているので、驚いています。最初は歯ブラシをかじって困りましたが、数回で馴れ、今はしっかり磨かせてくれます。こんなところも人間の子どものと同じです。

道で、飼い主仲間に会おうと、「あら、ブライアンくんのママ」と声を掛けられ、「ん？」と思ったものの、そうか、私はママか、と妙な納得です。

9 か月は人間でいうと 12 歳。思春期に入りました。去勢手術を受けなかったので、立派な男の子。一人前に足を上げてオシッコをするようになりました。犬も反抗期があるとか。さて、どんな反抗をしてくれるんでしょうか。楽しみです。

## 村本邦子

3ヶ月の間に、札幌、福島から青森、鹿児島から熊本、南三陸から多賀城、仙台、香港、フランス、島根、宮古、鹿児島から熊本、台湾と国内外を飛び回った。この後は、沖縄、福島、富山である。いろんなことをして、たくさんのことを学び吸収したので大満足だが(残念ながら人格的な成長はなかったが、知的成長はあった)、ほとんど家にいなかったのも、「ちょっと調子に乗り過ぎたな」と反省もし、年末年始は田舎に帰ってのんびりしようと思っている。好きなことしかしていないからか、それでもまったく病気になるらず、元気である。ただ、「晴れ女」のパワーが弱り、「災難女」になりつつあるのでは!?と密かに心配になっている。阿蘇が噴火し、宮城では大雨特別警報が出され、フランスのテロで。単なる確率の問題だろうか？

## 國友万裕

対人援助学会の大会で今年も発表しました。これで4年連続です。なかには関心を持ってくださった人もいましたし、「男

は痛い！」を読んでくれている人も結構いるのだということがわかりました。嬉しかったです。

しかし、その一方で、発表が終わると必ず孤独感が募ります。孤独の理由は何なのでしょう。

こういう発表をしていると、ぼくの頭のかなかにさまざまな思いがわきあがってくるのです。「ほかの男は、俺ほど男として通用しないタイプではない、俺ほど過酷なジェンダー教育を受けていない、俺ほど大きなジェンダー挫折をしていない、俺よりジェンダーに苦しんだやつはいない、男性ジェンダーのなかで生きていた方が楽だから、あえて、それに抵抗しようとはせず、ジェンダーの問題を看過してしまう。大抵の男が見過ぎてしまう問題に囚われてしまった俺はなんという不幸!!! なんという孤独!!! ひとりぼっち!!!」

こんなふうに表示していても、世間の大きな流れとなる日が来るのかと途方に迷ってしまうのです。

でも、この発表のため、中村正先生はきわめて友好的にぼくの話聞いてくれて、ジェンダーの部分ではぼくの一番の理解者になってくれています。

だから、来年も発表したいと思います。来年は横須賀だなあー。風のふく素敵な町に再び行ける日が楽しみです。

## 北村真也

認定フリースクール「アウラ学びの森 知識館」代表。(http://tiseikan.com)

あつという間に、秋が通り過ぎようとしています。10月には親支援のためのスペース、「(社)さよなら不登校」を立ち上げました。亀岡から街中へと移動する日々が続きます。

## 古川秀明

シンガーソングライター

成功した時よりも失敗したときのほうが多くのことを学べる。聞きなれた言葉ですが、今回はそれを身を持って体験できました。次回にどんな話をするのかを考えるのがとても楽しくなっています。よく考えたら、話が成功するかしないかよりも、自分が楽しめているということが一番の幸せか

もしれません。

## 西川友理

京都西山短期大学で、仏教学科仏教保育専攻講師／実習指導室担当／学生支援センター担当。いろいろと学生支援に関わる事をさせていただいています。

「実習指導」の授業は大変だけど好き、という教員は多いように思います。

実習の前後で、学生が大きく変化します。その変化を間近で見ると、本当に興味深いのです。学生の成長を見せていただく事はもちろん嬉しいですし、学生が挫折した時には、どうやってその挫折をその後活かしていくか、一緒に考えていく成長に立ち会えます。

社会性やパーソナリティにちょっと配慮が必要な学生については、事前に担当教員が実習先に連絡をし、どんな実習にするか、一緒に考えます。「あの一、ちょっと難しい学生なんですけど…」とおずおずと先方に申し出た時に、「本人は実習したいんですね？だったら、一緒に実習を作っていきましょう！」と私達を励まし、学生としっかり向き合って実習指導をしてくださる実習担当職員の方に何度も出会いました。その方々に、今まで何度救われたか！

そしてまた1月に新たな実習がスタートします。たくさんの現場の職員の皆様、そして利用者の皆様に支えて頂いて、学生さん達の実習は成り立っています。

## 坂口伊都



NPO 法人チャイルド・リソース・センター(CRC)から親子関係再構築プログラム

の著書が出ました。大阪府等の児童相談所から委託を受けて「CRC 親子プログラムふあり」を提供しています。このプログラムは、子どもの関りを通して、親が子どもにとってよりよい親子関係とは何か考えるよう働きかけています。子どもが自分を肯定して生きられるように、親が子どもにとって安心な存在でいられるために何が必要か、ということをおとと親と共に考えています。

こんなプログラムですから、何を実際にしているのか上手く伝えられないという思いを抱えていました。プログラムを始めて8年が経ち、現在9年目。来年度で10年になります。一組、一組違うあり様の親子と共に悩み考えるプログラムだと感じています。ここでの経験が私自身の大きな学びになり、養育里親をする後押しになっています。人を支援するのは、簡単ではありませんし、時には苦しくもなりますが、親子と一緒に喜びあう瞬間もあります。CRCが活動を通して、何に注目して大切にしてきたかが伝わる本に仕上がったのではないかと思います。よかったです、手に取ってみてください。

## 河岸由里子

北海道かうんせりんぐるむ  
1かかし主宰 臨床心理士

発見！！ある小学校にスクールカウンセラーのお仕事に行った時のこと。校務技師が、校庭の枯れたアジサイの花の中に隠れていたと言って、見せてくれた。プラスチックの様な透き通った身体の中に黒い部分と金色の部分がある。何とも不思議な昆虫である。第一声は「かわいい！」

ジンガサハムシと言うそう。大きさはテントウムシより少し大きい位か。色々な虫を見てきたが、こんな虫は初めて。金色がまぶしい程輝いていて、金属のように見える。まだまだ知らないことが一杯ある。本当に世界は面白い！！

## 団士郎

11月21-22日、台北で開催されたアジア災害後心理援助国際学術検討会で報告とマンガ展をした。

国外で木陰の物語を見てもらうのは昨

年の上海、今年3月のNYに続いて三度目。台湾のお客さんが今までで一番熱心に英文の作品を見てくれた気がする。会場設置のアンケートも30枚近い漢字びっしりのものが集まった。



台北は三度目の訪問だったが、慌ただしい中、近郊の町や村を訪れた。ウーライはバスで40分ほど山の中に入った温泉場。更に山の中に、土砂災害の爪痕がそのままの自称楽園があった。

食事はあちこちの屋台店であれこれ試したが、まあおいしかった。あまり高級なところには行ってないからね。

30分近く乗り続ける猫空ロープウェイも試してみた。お気に入りの書店「誠品信義店」にも行けた。

そして、短期充実の台北から、午後2時40分開始の授業に間に合うようにホテルを早朝5時半に出て帰国。そのまま授業開始の12分前に立命館大学に着いた。

## 岡崎正明

大学時代の仲間で年に1度集まる。同窓会気分でお小旅行を楽しみ、夜の宴会では何も考えずパカ話をする。くだらないけど毎年楽しみにしている。

今年は幹事をしたが、準備段階は何かと考えることが多い。場所の選定から予算的なこと、雨が降ったらどうするか、電車や船の時間はどうなっているかなど細々したことだが、みなを楽しめる器を用意するというのは、それなりに骨が折れる。まあ好きでやっているんだが。

参加者に事前に集合場所や計画を連絡しているにも関わらず、前日になって「どこで待ち合わせだっけ？」とメールしてきたり、持って来いと言ったものを平気で忘れるヤツもいたりする(たいてい同じ人だったりする)。

気が短い私はすぐカチンとくるのだが、

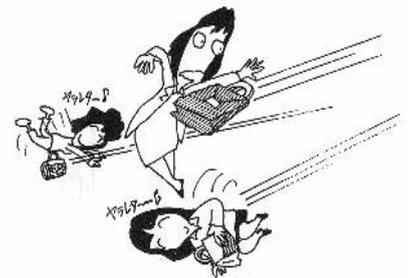
そこで「まあまあ」と己に言い聞かす。相手は自分のように何カ月も前から考えたり、準備したりしていない。せいぜい1、2度来たメールをナナム読みした程度。こちらとは当事者意識に画然の差があるのだ。怒ってもしようがない。自分だっただけの参加者のときは、そんなものではないか。そして「飯がいまいち」だの「寒かった」だの、悪気も配慮もなく被害者面して言い放ってしまうことがあるものだ。

そんな風に考えると、与党の独善とか野党の無責任とか、社長の孤独とか部下の無力感とか、いろいろ共通する部分があるよなあ…などと派生して考えたり。でもバカ話する楽しみが勝って、その後は何も考えなくなる。

個人的にはどうせ物事に関わるなら、なるべく被害者的であるよりも、当事者的でありたいと思っている。同じように上手いかわなくても、自分の頭で考え、主体的に挑める「当事者」の方が、結果にも納得がいく気がするからだ。

本文でも当事者性に関わる話が出てくる。ぜひ一読を。

[buimen0412@yahoo.co.jp](mailto:buimen0412@yahoo.co.jp)



## 鶴谷主一

11月1日の対人援助学会理事企画のシンポジウムでは「福祉の現場とお金」というテーマでパネリストの一人として登壇させて頂きましたが、どうもテーマとズレたことを喋ってしまい、幼稚園経営者とはいえ、自分はやっぱりお金(経営)には疎いなあ、と実感いたしました。

でも少子化の煽りを受けて、そんなことは言っていられない現実も迫ってきています。お金のことを悩まずに、好きな保育をやりたい

い！と思いますが、いまの日本では難しいですねえ。

今年度から始まった「子ども子育て支援新制度」では、待機児童解消のために国から大きなお金が動きました。それにうまく乗っていくのは株式会社の保育園だったり、保育実践より経営が好きな社福の理事長だったりします。なんだかなあ〜…とは思いますが苦手だとばかり思っていないで、電卓をしっかりと叩けるようになっては、と感じているこの頃です。

原町幼稚園ホームページ

<http://www.haramachi-ki.jp>

メール osakana@haramachi-ki.jp

ツイッター haramachikinder

## 千葉晃央

今、丁寧にノートをとりながら読んでいる本がある。この時間がとても贅沢に感じている。私の脳のスペックではノートを取らないとついていけない。それでも、鉛筆とノートという昔からのツールが深夜に鳴らす鉛筆の音が心地よい体験をしている。◆対人援助学会第7回大会に2日目から参加した。基調講演の「脱成長の時代の経済学 -対人援助者にとっての資本主義社会の現在-立命館大学国際関係学部高橋伸彰教授のお話を聴かせていただいた。理論から考える現在流行っている経済学の視点…。これは福祉現場とて同じ。福祉活動、経済活動ともに住民のところで行われているわけで、理論の先をいくことが今も、明日にも起こり続けていく。理論で説明することの声の大きさには気を付けた方がいい。生きているのはどっちだ！というところ。◆NPO自立サポートセンターもやいの稲葉剛氏の貧困をテーマにした勉強会に参加。普段なかなかお会いすることがなかった方々に混じらせていただいた。熱い方々、各現場最前線での実践のお話はとても刺激的。また参加したい。この社会問題に向き合うパワーがとても力強い。◆生きるということなんだとあらためて実感する。ある層の人が抱えてきた気持ちが以前よりみえた。生きるとはこういうことなんだ…。何か

を成し遂げた人だけが偉大なのではない。生きる事実がもたらす、さまざまな事象が以前より知ることになった。

## 大川聡子

現在連載中の「10代の母という生き方」が、科研費の研究公開促進費(学術図書)の助成を受け、晃洋書房から出版されることになりました。詳細は次号でお知らせします。

11月はAmerican Public Health Associationに参加するためにシカゴに行ったり、ニュージーランドのPlunket Nurseを招へいして講演会を実施したりなど、私にとって非日常的な業務が多く、気づいたらあつという間に12月でした。博論執筆時がピークだと思っていた忙しさが年々加速してびっくりです。

来年は今年より余裕がありそうなので、マガジンの原稿も×切に遅れず、編集長のお手を煩わせることもないような気がするのですが…(願望)。



2001年作画

## 大谷多加志

2015年も、残すところわずかです。年末になると年賀状の準備が気になるのが定例ですが、ここ2年、喪中が続いて年賀状を出していません。人を看取る、そういう年齢になったのだなと思います。喪中ハガキは投函済みで、一部お店のセールスのもを除けば、2016年も我が家に年賀状は届きません。学生時代の友人、知人とのやりとりは年賀状くらいしかないことも多く、直接近況を知る機会がありません。しかし、間接的な形で多くの人の近況を知ることができています。ある人は、仕事関係者の人伝で、ある人は学会誌の紙面上で、ある人は研修会の案内で、活躍を目にする様になりました。これもまた、そうい

う年齢になったのだと思います。お互い、よい年のとり方ができているような気がして嬉しいです。

## 竹中尚文

浄土真宗本願寺派専光寺住職

20号(2015年3月15日発行)の執筆者短信でDV被害者である女性のことに触れた。その後、何度か電話で彼女の思いを聞いた。なかなか決心がつかないようだった。そうしている内に、事態が深刻化しないか心配していた。夏に、突然、彼女の携帯が不通になった。私は妻と、彼女のアパートをこっそり見に行った。生活の気配がしない。2、3日程してから、また様子を見に行った。ズボンとTシャツの洗濯物が干してあった。また、数日して様子を見に行った。子供の洗濯物が干してない。3歳と0歳の子供がいるのだから、夏に子供の洗濯をせざる暮らせるわけがない。ポツリポツリと一ヶ月程様子を見に行った。このアパートには彼女と子供はいなくて、シェルターに逃げ込んだのだろうと想像した。待つことにした。先日、彼女から電話があった。やはりシェルターにいた。お寺とおばあちゃんにだけ、無事であると知らせてくれた。◆悲しみに寄り添うのが私の仕事である。悲しみに寄り添うと言うと、当事者でないのだから分からないだろうという声もある。実体験しないと分からないなら、死んだ人の気持ちは死ぬまで分からないことになる。人の死に対する悲しみ、それを共感するのは大切なことである。死に対する感情、それは悲しみや怒りや慈しみの感情が入り交じる。◆テロがあって、多くの命が失われた。命の数以上の感情がある。9・11の時に、日系米人が「あの時と同じだ」と言った。あの時とはパールハーバーのこと。努力を重ねてきたアメリカ社会が、未だにホストソサエティーを作り上げられずにいることを露呈した。フランス社会も同様である。無宗教者と言うマジョリティーが、信仰者と言うマイノリティーを抑圧している。この構造は、西ヨーロッパほど顕著ではないが、世界に広がつつある。私たちには、悲しみに寄り添いつつ、その悲しみを拡大しない冷静な目が必要なのであろう。

# 川崎二三彦

## 思案投げ首

前号近況欄で「右上腕二頭筋長頭腱炎」を発症したことを報告したが、幸いにも我が身の自然治癒力が勝ったのか、次第に痛みが薄くなり軽快、今では何不自由なくPCに向かう事が出来たのは良かったとして、何の因果か、次は「左足の足底筋膜炎(腱膜炎)」に襲われた。あるとき、足の裏が痛み出したのである。この症状、わかりやすく言うと、老化に伴い足の裏の「土踏まず」が、次第にべしゃんこになっていくことで腱が引っ張られ、炎症を起こすものであるらしい。

2014.11.17 函館新聞

### 児童虐待ゼロへ知識共有 函館児童相談所講演会



注意点のアドバイス

パワポが作動しなかった  
函館での講演会  
(11月7日付け函館新聞)

現在、土踏まずを維持するための中敷きを靴底に敷いて対応しているのだけれど、必ずしも十分とは言えず、ついには、人生初めて百貨店の介護フェアコーナーに出向き、5分でできるという詳細な検査を実施、我が足に合わせて特注した中敷きを製作中である。ちなみにお値段は五万四千元也。老化悲話と言うべきであろう。

それはさておき、前号で前号で紹介したように、相変わらずのホテル暮らしが続き、9月12泊、10月11泊、11月15泊。12月も今のところ10泊する予定である。いろいろな用務があるけれど、特に11月は「児童虐待防止推進月間」なので、講演を頼まれることが多かった。

そこで、自慢のパワポが活躍するのだが、この間、あちこちで手痛い目に遭った。他人のPCを使うと、妙なところで文字

の改行が起こったり、アニメーションの不具合が起こる虞があるので、常に愛用のPCを持参し、会場に到着して備え付けのプロジェクターと接続するのだけれど、画面サイズが合わなかったり、接続した途端にパワポが停止してにつちもさつちもいなくなるなどして、この間、二度にわたって我がマシンの使用を諦め、会場のPCを借りるはめに陥った。

函館でのことだ。会場PCのパワポバージョンが2007だという。こっちはパワポ2013なので、いやな予感に包まれつつスタートさせると、あに図らんや、スライドの数枚が何も映らず真っ白になって頭も真っ白、演壇で激しく立ち往生したのであった。気を取り直し、

「ここには、かくかくしかじかで苦心惨憺した画像がある筈なんですよ！」

などと、そのすごさを熱弁するのだが、見ている方はちんぷんかん。散々の展開というほかない。



パワポの不具合と足底筋膜炎で疲れ五稜郭で休む筆者

実は講演終了後、連れ合いと合流して函館観光を敢行したのだけれど、大変すばらしかったこの地の様子とは裏腹に、パワポの不具合と「足底筋膜炎」で、私は疲れてしまったのでございます。

\*

ところで、連載「映画の中の子どもたち」は、今号で22回を数えるのだけれど、諸般の事情でそろそろ終結もしくは断続的投稿として、新しい連載を始めることに、しようかどうか、現在思案投げ首沈思黙考鋭意熟考迷妄冥想真っ最中でございます。とりあえずのお知らせでした。

(2015/12/01 記)

## 荒木晃子

今年で7年目を迎えた対人援助学会に、2本の演題を提出した。一本は、「島根モデルの取り組み」を勤務先クリニックの担当看護師が口頭発表。7年前にスタートし

た筆者の研究が、島根県行政、産科・生殖医療機関、子どもの福祉に携わる児相など、各機関の援助者たちの手で地域に具現化された報告だ。でも、何よりうれしかったのは、当事者支援のための研究構想が、実際に地域社会で実現されつつあること。そして、それを実践する生殖医療の援助者から報告できたことである。取り組む研究が、机上の空論で終わらないとは、誠に研究者冥利に尽きる。これまでご協力いただいた全ての方々に改めて感謝したい。

一方、筆者といえば、「卵子提供による家族形成と対人援助」と題して、しばらくぶりのポスター発表。口頭発表とは異なり、ポスターセッションは時間制限がないので嫌いではない。ただし、見た人に関心を持ってもらえなければ、どこかから閑古鳥の音が聞こえ、最後には羊の数を数える羽目になる。しかし今回の発表では、在席時間を過ぎても質疑応答が続くほど多くの関心を寄せていただいたように感じた。足を止め、熱心に耳を傾けてくださった方々に、この場を借りて感謝したい。老若男女(年配の男性はなかったかな?)から、疑問や質問、コメントなど、たくさんのご意見をいただいた。

あたりまえのようにパートナーを得て、自然に子どもを授かり家族を形成することがかなわない多くの当事者がいること。家族形成に困難を抱え、そのための支援を必要としている人々が存在すること。そして、そのような当事者の家族形成に生殖技術を介して貢献したいと願う人々が実際に存在すること。そんな実際を知っていただきたいという筆者の願いを、みなさんに叶えていただいた気がする。

また後日、筆者のメールボックスに、先の学会に関東方面から参加し、ポスターに熱心に関心を寄せてくださった男性からの「お礼メール」が届いた。その方のご専門は高齢者福祉。メールには、「(前略)家族とは?家族のありかたとは?社会の変化から受ける影響や社会に与える影響、援助職としての在り方...など、何となくではあります色が々と考えさせられる部分が少しずつ湧いてきていると言いますか、刺激を受けたように思います(後略)」とあり、対人援助マガジンの読者だともしたた

められていた。こういったメールを、そう頻繁にいただくことはないだけに、とてもうれしく、また、こころにしみる一報であった。

知らない誰かが、どこかで誰かが愛読してくれる。だから今は、さらに研究に精進しよう、マガジンの連載も頑張ろうと思える。ひとは誰かに応援してもらっていると感じると、不思議に力が湧いてくる。まことに感謝である。

## サトウタツヤ

学会誌『対人援助学研究』の編集委員長に就任しました。中村正理事長と共に、学会を盛り上げていきたいと思えます。学会誌、あまりに論文少ないですね。

『対人援助学マガジン』の掲載記事数と比べるのはあまりにも僭越なのですが、学会誌がそれなりの存在感を示すことができるようにしていきたいと思えます。

手始めに編集委員制度、編集幹事制度を作ろうと思ってます。編集幹事になりたい若手研究志向の方、連絡ください。

そして、会員のみなさん、論文投稿ヨロシク。

学会誌アドレス

<http://www.humanservices.jp/journal/journal.html>

## 浅野貴博

9月末にイギリスから帰国しました。前回の短信で触れましたが、4年前に渡航した際は2人だった子供が4人に増えての帰国となりました。大量の荷物を抱えての移動の様子は、端から見るとさながらちょっとした民族移動のようだったと思えますが、本当にヘトヘトになりました。帰国前後は色々忙しく、長い留学生生活をようやく終えた感慨に浸る間もなかったのですが、新しい生活のペースにも慣れてきました。上の2人の子供は、イギリスの小学校との様々な違いに戸惑いながらも、少しずつ日本の小学校にアジャストしているところですよ。

本文でも触れました通り、今号をもって連載は終了します。私の拙い文章にこれまでお付き合い頂きありがとうございました。学会等でお会いする機会がありましたら、ぜひ声を掛けて頂けるとありがたいです。

## 見野 大介 みのだいすけ

陶芸工房 八鳥 hachi-dori

秋のイベントラッシュも無事に終わることができました。反省点も多々ありますが、最善は尽くせたかと思えます。作りたいもの、作らないといけないもの、課題が沢山できたので、12月に頑張りたいと思えます。

年内は予定通りに餅つきが現段階で3件あるので、体を鍛えて準備しておかないと…。

3月の京都高島屋での個展に向けて制作もポチポチ始めていきます。来年も忙しくなるので、今からとても楽しみです。



2001年作画

今回の執筆者短信欄に掲載の漫画は、2001年に雑誌「児童心理」にコラムと共に連載したもののなかから抜粋です。